

陽気だより

養徳社 検索

ホームページからご覧いただけます
No.31 2009.10.15

第4号(24年8月号)から

『陽気』は、昭和24年4月の創刊、今年が60年の年です。過去の記事から、その歩みの一端を振り返っていきます。

ソ連抑留生活記

星よ情けあれ

妻子や親と別れて既に十年、「異国の丘」に激しい労役を強いられつつ空腹に泣く捕虜の惨めな生活に涙せよ！
一日も早く彼らの帰還を祈る！

上田理太郎

その朝は物すごい吹雪であった。私と加世は、炊事場で受け取った大きな飯櫃をかついでいた。「溝だ、気をつけろよ」と、後棒をかついでいる加世に、声をかけた。

「了解、……ゆっくり行つてくれ」

了解などと、海軍言葉を忘れずにいる加世は、予科練で十九歳の少年だった。

雪に埋もれて溝のありどころはわからない。ただ、毎朝飯の受け取りに通う当番たちが、目標においた石で、それと見当がつくだけであった。

私たちは這うように歩いていた。雪が真正面から吹きつけるので目を開けておれなかつたし、飯櫃の中味は水が半分以上の粥食であったから、急げば、ちやぶついでこぼれ

そうになるのだ。その上、シベリアの冬の五時半といえば、まだ夜中も同様で、踏みかためられて氷板のようになった悪道で、とても普通の歩速であるけなかつた。

丸太を投げつけた。「アツ」と、よるめいているうちに素早く櫃のふたを開け飛ばし、飯盒に一杯すくうて逃げていった。

「この野郎、……おい、どろぼうだ、どろぼうだ」と叫ぶばかりである。二人の息が合せて、箱をおろしたときには、犯人はずでに闇にまぎれ去っていた。

二人は呆然と立っていた。

しばらくは、何も言えなかつた。飯盒に一杯といえば、二人分の食事である。十六人分の中から、それだけ引かれると、一人あたりの量は目立つて減少する。それでなくても一杯の粥の量に目を光らせている捕虜たちの生活である。この被害を隠しおこせるはずはなかつた。

「もう一度、もらいに行こうか」

加世は答えなかつた。それは「だめですよ」という意味だ。私は、もうそれ以上、言うことがなかつた。

たとえ、もらいに行つても、時間がかかるばかりだ。まごついていれば、作業初めの整列に間に合いかねることは明らかだし、意地わるい炊事係から「お前たちが食つておいで、うまいこと言うな」と、

さんざん、いびりまわされた上、被害の量の半分にあつて、被褥の量が半分にあつて、

当番たちが、暗がりにかくれて私腹を満たしているところを、再三ならず挙げられていた。

「上田さん、今朝は私たちが、がまんしましょう」

私はうなずいた。私はそれ

でいい。少年の加世にそれを強いては、余りにも苛酷だつた。しかし、食えないと思うと急に寒さが身にしみ、当番のつらさが、一そう加わってくるのであつた。(後略)

※上田理太郎(1909~1991)『陽気』創刊から編集責任者として健筆をふるう。この時、40歳。

シベリア抑留者の数はまだ不明。約60万人とも。劣悪な生活環境、食糧不足と寒気、重労働のため6~7万人が死亡したと推定される。



かんろだいを間近に

本部北礼拝場の結界側に立って雛形かんろだいをみると、六角形十三段の一番下の台の周囲に黒い石が敷き詰められているのを、垣間見ることが出来る。おつとめ後、その石に目をやると、その昔、地面にしゃがんで「ぢば」に向かって祈りを捧げていた人々の姿が浮かんでくる。

明治8年（1875・立教38）6月29日（陰暦5月26日）にかんろだいのぢば定めがされた。

「教祖は、先ず自ら庭の中を歩まれ、足がびたりと地面にひつついて前へも横へも動かなく成った地点に標を付けられた。然る後、こかん、仲田松尾、辻ます、樫枝村の与助等の人々を、次々と、目隠しをして歩かされた処、皆、同じ処へ吸い寄せられるように立ち止った。……こうして、

明治八年六月二十九日、陰暦の五月二十六日に、かんろだいのぢばが、初めて明らかに示された。時刻は昼頃であった」

（『稿本天理教教祖伝』128～129頁）。そして、明治8年9月ころ、



こかん様の身上のお願いごとめにあたり、明治6年に飯降伊蔵様に作らせられた模型のかんろだいを初めて元のぢばに据えられたということである。（教祖伝109頁参照）

その後、明治15年5月12日、二段まで出来ていたかんろだいの石が警察に取り払われ、あとには「小石」が積み重ねられた。

「人々は、綺麗に洗い浄めた小石を持って来ては、積んである石の一つを頂いて戻り、痛む所、悩む所をさすって、数々の珍らしいご守護を頂いた」

（教祖伝239頁）

という。「ぢば」の周囲には、教祖殿の北庭にある「記念建物」しかない姿を思い、迫害厳しい中で、親を慕い、人々が真剣な祈りを捧げる様子を想像する。そうして持ち帰った石。その切なる思いを現在の黒い石に重ねたとき、真心から親神様を信じ切り、教祖に心底すがった先人の純粹な信仰の万分の一でも、わが身にいただきたいと思わずにはいられなくなった。

（参考 『ドキュメントかんろだいの物語』道友社編）

「陽気」創刊60年記念出版
秋季大祭発刊

人生終なし

じんせいにおわりなし

父 柏木庫治を語る

3人の兄妹によるてい談
「陽気」掲載記事
柏木庫治小伝

「陽気」編集部編
四六判並製・280頁
定価=1,260円（税込）

図書出版 養徳社
天理市川原城町388
☎(0743)62-4503
http://yotokusha.com/

月刊雑誌 お道の人の 創刊60年

陽気

『創刊60年定期購読特別割引』

通常 1年分 2,840円 → 2,400円

（税込・送料込）

※特別割引は平成21年12月末日お申込分までとなります

お申込は 今すぐ！
〒632-0016 天理市川原城町388
TEL0743-62-4503 FAX0743-63-8077
養徳社 陽気定期購読係まで

「陽気」創刊60年記念出版

道の八十年

—松村吉太郎自伝—
天理教の歴史とともに
生き抜いた信仰軌跡

松村吉太郎 著 定価=1,680円（税込）
送料200円
（高安大教会初代会長）

「陽気」創刊60年記念出版

お道の人の とっておきの話

お道の人の美しい心象風景 52話

朝席・夕席に最適です
定価=1,260円（税込） 送料200円

養徳社 よもやま話

○月〇日 10月26日に弊社より発行する新刊「人生終なし」の装丁を担当したため、ゲラ刷りを読むことにした。二十代後半の私は、柏木庫治という名前だけは知っていた。しかし、ゲラ刷りを読み進めていくと、だんだん「柏木庫治」という人物が浮かび上がり、読み終える頃にははつきりと見えたように感じた。柏木庫治の名前だけを知る、若い世代の人たちにも読んでもらいたいと思った。

○……本部参拝の途次、うかつにも「社会の窓」が開いておりました。正面から来られた、参拝を終えた方に指摘され、恥ずかしい思いをしました。そのあと、「年寄りには仕方ないわな」と言われてしまいました。私はまだ五十代、はるかにシヨッキンクな言葉でした。

広告を載せませんか

ようぼくの企業や会社の広告を『陽気』誌へ載せてみませんか？ 料金は、記事中で一回二万円から。

詳しくは養徳社広告係まで
☎0743・62・4503

この「陽気だより」を各支部例会などの折、広く養徳社からのお知らせとしてご利用ください。ますよう、お願い申し上げます。

養徳社